

魂の歷程(3)

—Bonaventura, *Itinerarium mentis in Deum* 第2章註解—

長倉久子

『精神の神への歷程』(*Itinerarium mentis in Deum*) 第1章(翻訳と註解が『南山神学』第7号〔1984〕にある)において、ボナヴェントゥラは、可感的世界の諸事物が神の力と知恵と善性を、アナログ的仕方で、如何に雄弁に物語っているかを示したが、同書序文(翻訳と註解が『南山神学』第5号〔1982〕にある)と第1章において図式化した神への旅路の第二段階として、第2章において、可感的世界が五感を通して人間の精神のうちに入ってくるという事実のうちに、神の秘義を観想するように読者を招いている。

彼は先ず、大宇宙である被造的宇宙の構造を明らかにし(第2節)、続いて、小宇宙たる人間の精神のうちに可感的世界の諸事物が感覚を通して入ってくること、そしてこれを通して非可感的なるもの(霊的動者)の認識にまで導かれることを示している(第3節)。この感覚を通して入ってくる可感的諸事物は、人間の魂によって受けとられ、知覚・享受・判断の三つの作用を魂のうちに惹き起こすが、これら三つの作用を分析してみるならば(第4～6節)、夫々の働きが、神の秘義を人間に開示するとボナヴェントゥラは主張する。すなわち、知覚の構造は、御子の、御父よりの永遠の誕生をアナログ的に顕現する(第7節)。また、享受の行為を通して、享受をもたらす美・甘美・健全の源である御子に導かれる(第8節)。更に、感覚を通して入ってくる一切のものに判断を下す働きは、永遠不変不可謬の神的理拠を要請する(第9節)。

宇宙の構造や、可感的事物が魂に及ぼす働きと魂の作用に関するボナヴェントゥラの記述は、概ね、当時アヴィケンナやアヴェロエスの解釈を経て西欧に伝えられたネオ・プラトニズムの色彩を帯びたアリストテレスに依拠するものであるが、彼は、これを巧みにアウグスティヌスの世界観に変容していく（第7節以下）。そして、アウグスティヌスの『音楽論』第6巻を拠り所にして数的世界観に発展させ、この世界に見出される数的なるものを通して数の源泉であり範型である神にまで導いて行こうと試みている（第10節）。ボナヴェントゥラにとってこの世界は、ネオ・プラトニズムの存在論の影響の下で思索したアウグスティヌスにとってそうだったように、第一原理なる神の影であり、反響であり、絵画であり、また痕跡であり像であり、しるしである（第11節）。この世界にある一切のものは、見えざる神を表現する見えるしるしであり、人間は、この見えるしるしである可感的事物を通して見えざる神へと導かれる。神によって造られた自然は、そのまま造り主なる神を雄弁に物語っているが、神は、かてて加えて、救済の歴史の中で、預言者たちを通して、天使たちの働きを通して、更に秘跡の制度を通して、御自身を顕現された（第12節）。従って、この自然界において神を認め、讃え、愛そうとしないものは弁解できない、とパウロの書簡を引用して、この章を締めくくっている。そして、感性的諸事物との直接的な関わりにおける魂の働きを通して神を観照したこの章に続いて、感性的事物との直接的関わりを離れて精神の働きを考察し、これによって神をより高次の仕方でも観照する第三章に備えて、自己の外なるものから内なるものへ立ち返るよう、読者に呼びかけてこの章を閉じている。

第 二 章

この可感的世界において、神をその痕跡において観照することについて

1 ところで、可感的諸事物の鏡によって神が観想¹⁾されうるのは、たゞ

単に痕跡を通すように可感的諸事物を通してのみなのではない。可感的諸事物においてもまた、それらのうちに神が本質と力と現存によって存在するという限りで、神は観想されることができるのである。²⁾そして、後者の考察は、前者のものよりも、一段高度のものである。従って、かゝる考察は、観想の第二段階として、第二の位置を占めている。この段階において、我々は、凡ゆる被造物において、つまり、我々の精神に身体的感覚を通して入って来る全ての被造物において、神を観想するよう手をとって導かれねばならない。

- 2) それゆえ、注目しなければならないことは、この世界——大宇宙と呼ばれている——が、我々の魂 (*anima nostra*) ——小世界と呼ばれている——に、³⁾ 五つの感覚の門を通して、それら可感的諸事物の知覚 (*apprehensio*) と享受 (*oblectatio*) と判断 (*diudicatio*) に即して入って来ることである。

このことは以下の如く明らかである。すなわち、この世界のうちには、産み出す事物があり、また産み出された事物があり、そして、それら両者を統率する事物がある。産み出す事物というのは単純物体、すなわち天体と四元素である。なぜなら諸元素から、諸元素の反対対立を和解させて混合物体とする光の作用力によって、産み出され作り出されるというのが、自然力の働きによって産み出され作り出されるもの全ての生成や産出の必然的なあり方なのであるから。

他方、産み出されたものというのは、諸元素から複合された物体で、例えば、鉱物、植物、動物 (*sensibilia*)、及び人間の身体である。

これらの諸々の産み出す事物や産み出される事物を統率する事物というのは、霊的実体 (*substantiae spirituales*) であり、それは、動物の魂のように全く (身体と) 結合しているものもあれば、理性的精神のように (身体から) 分離可能な仕方でも結合しているものもあり、また天的霊 (*spiritus caelestes*) のように (身体から) 完全に分離されているものもある。この天的霊を、哲学者達は知性者 (*Intelligentiae*) と呼び、我々

は天使 (Angeli) と呼んでいる。哲学者たちによれば、この天的靈たちに、天体を動かすことが属するのであって、この故に、彼らに「宇宙の統治」(administratio universi)が帰属せしめられるが、それは、第一原因すなわち神から、力の流入(influentia)を受け取り、その力の流入を、統宰の業に従って溢れる如くに注ぐことによって行われるのである、そして、この統宰の業こそ事物の自然的堅固さに係わるものである。⁴⁾ 他方、神学者たちによれば、彼らに(役割として)帰属せしめられるのは、至高なる神の命に従って、回復の諸々の業 (opera reparationis) に関して宇宙を支配すること (regimen universi) である。そして、この回復の諸々の業のゆえに、彼らは「救いを受け継ぐことになっている人びとのために遣わされた奉仕する靈たち (administratores spiritus)」⁵⁾ と言われているのである。

- 3 それゆえ、小世界と呼ばれている人間は、五つの感覚を有っているが、それらは恰も五つの門の如くであり、この門を通して、一切の事物つまり可感的世界のうちにある一切の事物の認識が、人間の魂のうちに入るのである。すなわち、視覚によって至高にして光り輝く物体⁶⁾ とその他色のある物体が入り、触覚を通しては堅い地上の物体が入る。他方、三つの中間的感覚を通して中間的なものが入る。⁷⁾ すなわち味覚を通して水のようなものが、聴覚を通して空気のようなものが、嗅覚を通して気状のものが入ってくる。そして、この気状のものが、何か湿った性質のもの、何か空気のような性質のもの、また何か火のような或いは熱のような性質のものを有していることは、香料から発する香氣において明らかに見てとられる通りである。

それゆえ、これらの門を通して、単純物体も、またこれらから混合された複合物体も入ってくる。ところが我々は、感覚によって、たゞ単にこれらの個別的な可感的なるもの、つまり光、音、香、味、そして触覚が捉えるところの四つの第一諸性質⁸⁾ のみを知覚するのではない。我々は更に、共通的な可感的なるもの、つまり数、大きさ、形、静と動をも

また捉えるのである。⁹⁾そして、「全て動いているものは他者によって動かされて動いている」¹⁰⁾のであり、或るものどもは自らによって動かされ、また静止する、例えば動物がそうである。従って、我々はこれら五つの感覚を通して物体の運動を捉えることによって、ちょうど結果を通して原因の認識に至るように、霊的動者¹¹⁾の認識にまで導かれるのである。¹²⁾

4 それゆえ、事物の三つの類に関して、人間の魂のうちに、知覚 (apprehensio)によってこの可感的世界全体が入ってくる。ところで、これらの外的可感物は、五感の門を通して魂のうちに最初に入り込むものである。しかし、もちろん、これらが入ってくるのは実体を通してではなく、それらの実体の類似を通してである。これらの類似は先ず媒体のうちに生じ、¹³⁾次いで媒体から器官へ、外部器官から内部器官へ、そしてここから知覚能力 (potentia apprehensiva)に伝えられる。かくして、媒体に形象が生じ、媒体から器官に伝達され、知覚能力がその形象に向かうことによって、魂が外部に知覚する一切の事物の知覚が成立するのである。¹⁴⁾

5 この知覚は、それが適当な事物に関するものであれば、*・・・*楽しみ (oblectatio)をもたらず。ところで感覚は、抽象された類似を通して知覚された対象に (objecto percepto)満足を見出すが、個別的に特徴づけ関係づけて言えば (appropriate loquendo)、¹⁵⁾視覚の場合には美しさのゆえに、また嗅覚と聴覚の場合には甘美さのゆえに、また味覚と触覚の場合には健全さのゆえに、楽しみを与えられるのである。そして、*・*楽しみ・快 (delectatio) というものは全て均衡に基づいている。しかるに形象 (species) は形相と能力と作用の性格 (ratio) を有するが、それは、形象が、そこから生じ来る始源に対して、また、そこを通過する中間(媒体)に対して、そしてそこへと働きかける終極に対して、関係を有するという事実に応じてである。それゆえ、均衡が看取される場合は三つある。先ず、類似が形象 (species) あるいは形相の性格を有するという事

実に従って、類似において均衡は看取される。そしてこの場合、美しさ (*speciositas*) と呼ばれる。なぜなら、「美しさは、数的な等しさに他ならない」か、或いは「色彩の甘美さを伴った諸部分の配置 (*situs*)」なのであるから。¹⁶⁾ 均衡はまた、類似が力あるいは能力という観点を有す限りで看取される。そしてこの場合、作用する力がそれを受け取るものを不均合な仕方では超えることがない時には、甘美と呼ばれる。というのも、感覚は極度のものにおいては不快を感じ、適度のものにおいては快を感じるからである。¹⁷⁾ 均衡は更に、類似が作用力 (*efficacia*) と刻印 (*impressio*) という性格を有する限りで看取される。つまり、作用力とか刻印が均合うのは、作用者が刻印することによって受動者の不足を補う場合である。そして、このことは、受動者を保持し養うことである。これは味覚と触覚において最も明白である。そして、このようにして、楽しみを通して、外部にある楽しみをもたらす事物が、楽しみをもたらす三つの仕方に従って、類似を通して魂に入ってくるのである。

- 6 こうした知覚と楽しみその後には判断 (*diiudicatio*) が生じる。これによって判断されるのは、単に、これは白であるとか黒であるとかいうことのみではない。なぜなら、これは個別的感觉 (*sensus particularis*) に関わることだから。また、単にこれは健全であるとか有害であるとかいうことのみではない。なぜなら、これは内部感覚 (*sensus interioris*) に関わることだから。更にそれによって判断され、また説明が与えられるのは、なぜこれが楽しみをもたらすのか、についてである。そして、この行為において、対象から感覚のうちに知覚された楽しみの理由が問い求められるのである。ところで、美と甘美と健全さの理由が探究されるならば、それは等しさの均衡 (*proportio aequalitatis*) であることが見出される。しかるに、等しさの比 (*ratio*) は大きなものにおいても小さなものにおいても同じであり、また寸法によって拡がることもなく、過ぎ行くものとともに継起したり移り行くこともなく、また動きによって変えられることもない。それゆえ、それは場所・時間・運動から独立しており、ま

さにこのゆえに不変にして無辺、無限、そして全く霊的 (spiritualis) である。¹⁸⁾ 従って判断は、感覚によって感覺的に受け取られた可感的形象を、純化し抽象化しつつ知性能力に入らしめる行為である。かくして、この世界全体は、感覚の門を通じて、上述の三つの働きに従って、人間の魂のうちに入ることができるのである。

7 ところで、これら全ては痕跡 (vestigia) であり、我々はこれらの痕跡において我々の神を観照すること (speculari) ができる。¹⁹⁾ ——というのも、知覚された形象は、先ず媒体に産み出され次いで感覚器官に刻印された類似であり、その刻印を通じて自らの始源に、つまり認識すべき対象に導くのであるから、かの永遠の光が自らを始源として (ex se)、類似ないし、自らに等しく実体を共にし同じく永遠である光輝、を産み出すことを明らかに示唆している。そしてまた、「見えざる神の像、栄光の輝やき、神の実体の形姿」²⁰⁾ であり、ちょうど対象が自らの類似を媒体全体に産み出すように、その最初の誕生によって遍在するお方が、ちょうど形象が肉体的器官に結合するように、結合の恩恵 (gratia unionis) によって理性的本性を有する個人と結合し、この結合によって我々を、御父を始源 (fontalis principium) とし目的としてそこに導いて行く、ということを示している。それゆえ、もし認識の対象となるもの全てが自らの形象を産み出すのであるならば、それらのものうちに、いわば鏡を見るようにして、父なる神から永遠に流出する御言・像・御子の永遠の誕生を見ることができることを、明らかな仕方でそれらのものは宣言するのである。²¹⁾

8 かゝる仕方で美しく甘美で健全なものとして楽しみをもたらす形象 (species) は、かの第一の象^{かたどり} (species)²²⁾ について以下のことを示唆している。すなわち、かの第一の象のうち第一の美・甘美・健全があり、かのうちに産み出す者への至高の適合 (proportionalitas) と同等 (aequalitas) がある。またかのうちには、表象を通じてではなく知覚の真理を通じて流入する力 (virtus) がある。更にかのうちに、保持し満

たし、知覚する者の全ての不足を一掃する刻印(impressio)がある。従って、もし「楽しみは適合者同士的一致」²³⁾であり、たゞ神の類似²⁴⁾のみが至高の美・甘美・健全の性格を保持し、この類似が真理に従って、親密さに従って、また全ての受容力を満たす充満に従って(御父と)一つになっているのであれば、たゞ神のうちのみ泉である真なる楽しみがあり、一切の楽しみから、求めらるべきこの楽しみへと我々が導かれることは明らかに見てとられることができる。²⁵⁾

9 ところで、より勝れより直接的な仕方、判断は、我々をより確かな仕方、観照すべき永遠の真理に導く。つまり、判断は、場所と時間と可変性から、従って拡がり、継起と変化から抽象する理性によって、不可変・無辺・無終の理拠に拠って為されるはずであるが、²⁶⁾しかし、完全に不可変・無辺・無終なるものは、永遠なるものを除いては存在しない。ところで、永遠なるものは神であるか、或いは神のうちにあるかである。それゆえ、より確かな仕方、我々が判断するものは何であれ、全てかゝる理拠に拠って判断するのであるとすれば、明らかに、神こそは一切の事物の理拠であり不可謬の規範であり、真理の光である。そしてこの光のうち、凡ゆるものが、誤謬と消去の可能性なく、また疑いと反論と否定の余地なき仕方、不可変・不可限・不可終・不可分に、そして知性的なる仕方、光輝いている。それゆえ、かの諸法(leges)に拠って我々は我々の考察の対象として到来する可感的事物一切について確実な判断を下すのであるが、それらはそれらを捉える者の知性にとって不可謬で疑いえぬものであり、常に現在であるものとして、想起する者の記憶から消去しえぬものであり、判断する者の知性にとっては反論と否定の余地なきものであるから一なげなら、アウグスティヌスが言っているように、「何人もそれら(諸法)について判断を下すことはない。却ってそれらに拠って判断を下すのである」²⁷⁾から一それらは、必然的なるものとして不可変で不滅であり、無辺なるものとして不可限であり、従って知性的で非物的なるものとして不可分であり、造られたものではなくして創

造されざるものであり、永遠の匠 (ars aeterna)²⁸⁾ のうちに永遠的に存在している。これ (永遠の匠) によって、これを通して、そしてこれに従って一切の美しいもの (formosa) は形造られる (formantur)。それゆえ、これに拠らずしては確実な判断は不可能である。この永遠の匠は、一切のものを産み出す形相だったのみならず、一切のものを保存し区別する形相である。²⁹⁾ つまり、一切の事物のうちに形相を保持する存在者 (ens) であり、指示を与える規範である。そして、これを通じて我々の精神は、感覚を通してそこに入ってくる一切のものに判断を下すのである。³⁰⁾

- 10) ところでこの観照は、数の七つの種類を考察することによって拡大される。すなわちこれらの七種類の数をいわば七つの階段として神のうちにまで昇って行かれることを、アウグスティヌスは『真の宗教について』³¹⁾ と『音楽について』第六巻において示している。これらの書において彼は、これらの可感的諸事物を出発点として万物の製作者 (Opifex) にまで段階的に昇って行く数の種類を指摘し、それによって万物において神が見られるように配慮している。³²⁾

すなわち、アウグスティヌスは、物体のうちに、殊に音と声のうちに数があると言い、これらの数を響きをもった (sonantes) 数と呼ぶ。そして、これらから抽象されて我々の感覚のうちに受け取られた数があり、これらを彼は出会う (occursores) 数と呼んでいる。また、魂から出て肉体に至る数がある。これは例えば身振り手まねや舞踏の場合に明らかにみられるが、彼はこれらを現れ出る (progressores) 数と呼んでいる。更に、受け取られた形象に注意を向けることによって得られる感覚の諸々の楽しみのうちに数がある。そしてこれを感覚的な (sensuales) 数と呼んでいる。また、保持された記憶のうちに数があり、これを記憶の (memoriales) 数と呼んでいる。更にまた、これら全てについてそれに拠って我々が判断するところの数があり、これを判断的な (iudiciales) 数と呼んでいる。この数は、既述のように、不可謬で否定されえぬものと

して、必然的に（我々の）精神を超えている。ところで、これらの数によって我々の精神には芸術的な（artificiales）数が刻印される。しかしながら、この数については、これらの数の段階の中にアウグスティヌスは数えていない。というのも、この種の数は、判断的な数に結びつけられるからである。そして、これら（判断の数）から現出的数が流出し、現出的数をもととして作品（artificiata）の調和のとれた（numerosae）^{33）} 諸々の形相が創造されるのであるが、それは、最高の段階から始まり、中間を通して最低の段階まで順序よく下降するためである。また最高の段階までは、音響的な数から始まり、出会う数、感覚的な数、そして記憶的な数を通して段階的に我々は上昇して行くのである。

従って、全てのものは美しく、何らかの仕方では楽しみをもたらすものであり、美しさと楽しみとは均合（proportio）なくしてはありえず、また均合は先ず第一に数のうちにあるから、全てのものは数的（numerosa）である。このため「数は創造主の精神のうちにあっては主たる範型であり」、^{34）} 事物のうちにあっては〈知恵〉^{35）} に導いて行く主たる痕跡である。^{36）} そして、これ（数）^{37）} は全ての人にとっては最も明らかであり、神には最も近いものであるから、いわば七つの異なる種類を通して神にもっとも近くまで導いていく。そして、我々が数的なるものを知覚する時、また数的な調和に楽しみを見出す時、そして数的な調和の諸法に拠って反論しえぬ仕方では判断する時、凡ゆる物体的また可感的事物において、我々に神を認識することを得させるのである。

- 11 これらの最初の二つの段階によって、恰も足のまわりに垂れていた二つの翼のように、^{38）} 痕跡において神を觀照するように、手を取って導かれる。そして、これら二つの段階からして、この可感的世界の被造物は全て、觀想的で思慮深い者の魂を永遠なる神に導く、と結論することができる。というのも、可感的世界の被造物は全て、最も力あり、最も英知に満ち、そして最善のかの第一原理の、かの永遠の始源・光・充滿の、そして、かの、存在を与え、範型となり、秩序を与える匠（Ars）の、影

であり、反響であり、絵画である。また、その痕跡であり、像(simulacra)であり、そして我々に神を知らしめるために³⁹⁾ 与えられた見もの(spectacula)であり、神から与えられたしるし(signa)である。つまり、可感的被造物は、まだ教養がなく感覚的レヴェルにいる人々(mentes)に与えられた写し(exemplaria) いやむしろ写しとられたもの(exemplata)であり、それは、彼らが、いわばしるしを通してしるしの示しているもの(signata)へと行くように、目で見える可感的事物を通して、目で見えない可感的事物に移り行かされるためである。

- 12 かくしてこの可感的世界のかゝる被造物は、神の見えざる諸性質(invisibilia)を表している。それというのも、神は全ての被造物にとって始源であり範型であり目的であって、全ての果は原因のしるしであり、範型の写しであり、また目的に導く道であるからである。またそれら自身の表現(repraesentatio)からして、或いはまた預言的な予表(praefiguratio)からして、更に天使の働きかけ(operatio)からして、そして最後にかえて加えて与えられた制度(institutio)⁴⁰⁾ からして、可感的被造物は神の見えざる諸性質を表している。事実、被造物は全て本性からしてかの永遠の英知のある種の似姿(effigies)であり類似であるが、特殊な仕方では、聖書で預言の霊によって霊的な事柄の予表として採り上げられているものがあり、更に特殊な仕方では、神が天使の奉仕のもとに、似姿を借りて現れることを欲したその似姿となった被造物がある。⁴¹⁾ また極めて特殊な仕方では、神がしるしとして制定することを欲したものがある。これは、たゞ単に一般的な意味でのしるしの性格を有するのみならず、秘跡の性格を有している。

- 13 以上のこと全てから、「神の見えざる諸性質は、世界の創造の時以来、造られたものを通して、知られ明らかに見てとられる」⁴²⁾ と結論される。それはあまりにも明らかであるから、これらのことに注意せず、これら全てのものにおいて神を認め・讃え・愛そうとしない者は「弁解できない」。⁴³⁾ というのも、彼らは「闇から出て神の驚嘆すべき光の方へ」⁴⁴⁾ 赴

こうとしないからである。「しかし、我等の主イエス・キリストによって神に感謝あれ。」⁴⁵⁾ キリストは我々を「闇から引き出し、御自分の驚嘆すべき光の中へ連れ行かれた。」⁴⁶⁾ 我々の精神の鏡に外的に与えられたこれらの諸々の光を通して、我々は、我々の精神の鏡に立ち返り、その中に入って行くことができる。そして、そこには神的なるものが光り輝いている。

注

略号

- E₁ *The Mind's Road to God*, translated with an introduction by Boas, The Library of Liberal Arts, 32 (New York, Liberal Arts Press, 1953)
- E₂ *Itinerarium mentis in Deum*, with an introduction, translation and commentary by Ph. Boehner, o. f. m. Works of Saint Bonaventure, 2 (New York : Franciscan Institute, St. Bonaventure, 1956)
- E₃ *The Journey of the Mind to God*, translated by Jose de Vink, The Works of Bonaventure, Cardinal Seraphic Doctor and Saint, I (Paterson, New Jersey, St. Anthony Guild Press : 1960)
- E₄ *The Mind's Journey to God : Itinerarium mentis in Deum*, translated from the Latin with an Introduction by L. S. Cunningham, with an essay "Bonaventure vs. Modern Thought" by L. Brophy (Chicago, Franciscan Herald Press, 1979).
- F₁ *Itinéraire de l'esprit vers Dieu*, texte de Quaracchi, Introduction, traduction et notes par Henry Duméry, Bibliothèque des textes philosophiques (Paris, Vrin : 1960)
- F₂ *L'itinéraire de l'âme à Dieu*, dans *Saint Bonaventure*, oeuvres présentées par le R. P. Valentin—M. Breton, *Les maîtres de la spiritualité chrétienne* (Paris, Aubier : 1943)
- F₃ *Itinerarium mentis ad Deum*, dans *Saint Bonaventure* par F. Palhoriès (Paris, Librairie Bloud et C^{ie}, 1913).
- D₁ *Itinerarium mentis in Deum, De reductione artium ad theologiam*, Lateinisch - deutsch. Eingeleitet, übersetzt und erläutert von Julian Kaup (München, Kösel - Verlag : 1961)
- D₂ *Bonaventura. Wanderweg zu Gott : Wanderbuch für den Besinn zu Gott, Am Steuer der Seele, Der Dreistieg oder drei Feuersbrunst der Liebe*, Die

Übertragung ins Deutsche, Besorgte von Wilhelm Hohn (Freiburg, Otto Water-Verlag : 1955)

S *Itinerario de la mente a Dios, en Obras de San Buenaventura. Biblioteca de Autores Cristianos*, edición bilingüe, dirigida, anotada y con introducciones por los pp. Leon Amoros, Bernardo Apperibay y Miguel Oromi (Madrid, B. A. C., Editorial Catorica : 1945-49) tomo primero.

- (1) 表題（及び第7、9、10、11節）においては観照（speculatio・speculari）の語が用いられているが、第1節（及び第11節）では観想（contemplatio・contemplari）の語が用いられている。両者の意味の相違については拙稿「魂の歷程——Bonaventura, *Itinerarium mentis in Deum* 序文註解——」『南山神学』第5号1982、p. 85、註6参照。
- (2) 可感的諸事物を通して（per）の神の観想は第1章において行われた。「神が諸事物のうちに本質と力と現存によって在す」ことについては「魂の歷程——Bonaventura, *Itinerarium mentis in Deum* 第1章註解」『南山神学』第7号 1984. p.130.註53参照。
- (3) 第1節では、「我々の精神に（ad mentem nostram）身体的感覚を通して入って来る」とあったが、ここでは「我々の魂に（ad animam nostram）五つの感覚を通して……入って来る」となっている。第1節でmensが使われているのはcontemplatio, contemplariとの関連から、また第2節でanimaが用いられているのはmacrocosmos, minor mundusとの関連から、と考えることができるのではないだろうか。この書でボナヴェントゥラは、mensとanimaの間に厳格な区別をして用いてはいない。上掲拙稿「序文註解」p. 79参照。
- (4) ここでボナヴェントゥラは、宇宙（macrocosmos）の構造を説明しているが、そこには、さまざまな宇宙観が混在している。先ず気づかれることは、月下の世界の構造がアリストテレスのそれに準拠していることである。すなわち、アリストテレスは、物体を単純なるものと混合せるものに分け、単純物体を更に四元素（火・空気・水・土）と第五元素（アイテール）に分けている。そして、混合物体は、四元素から成るものであり、四元素とともに月下の世界に見出される。他方、第五元素は月上の世界である惑星天と恒星天にあるものであって、諸天体は、このアイテールから成っている。（*De caelo* I, c. 1—c. 2 ; “Ἐπεὶ δὲ τῶν σωμάτων τὰ μὲν ἐστὶν ἀπλᾶ τὰ δὲ σύνθετα ἐκ τούτων (λέγω δ’ ἀπλᾶ ὅσα κινήσεως ἀρχὴν ἔχει κατὰ φύσιν, οἷον πῦρ καὶ γῆν καὶ τὰ τούτων εἶδη καὶ τὰ συγγενῆ τούτοις),...” *De caelo* 268 b 27—29 ; “Ἐκ τε δὴ τούτων φανερόν ὅτι πέφυκὲ τις οὐσία σώματος ἄλλη παρὰ τὰς ἐνταῦθα συστάσεις, θειότερα καὶ προτέρα τούτων ἀπάντων...” *ibid.* 269 a 31—32.)そして、この恒星天の天球の外には、如何なる物体も存在せず、従って、場所も空虚も、時間も存在しない。ここにあるものは、生成も消滅もせず、変化することも

老いることもなく、悠久 (*αἰών*) に亘ってその高貴で神的な存在を保っている。そしてこの悠久なるものどもに、物的なるものどもは存在と生命活動とをそれぞれに承担着負っているのである。(Ibid. c.9).

ところで、月下の世界の混合物体の生成消滅に関して、アリストテレスは *De generatione et corruptione II* において、三つの原因 (質料因・形相〔目的〕因・動力因) を区別しているが、*Itinerarium* のこの箇處では、四元素が質料因 (たゞし、アリストテレス自身は、四元素と質料因とは区別している。Ibid. c.1) にあたり、諸要素の反動的諸性質を和解させる光の力が動力因に、そして、産出された鉱物・植物・動物・人間の身体のそれぞれの形相が形相因・目的因 (生成の目指す終極) にあたろう。

ところで、ここで月下の世界の説明が、アリストテレスの *De caelo* 及び *De generatione et corruptione* に準拠すると思われる一方で、月上の世界としては、『創世記』冒頭の「はじめに神は天地をお造りになった」の伝統的註釈に従って、七つの惑星の在り処たる天球、恒星天としての澄んで輝く蒼穹、澄んだ水晶天、そして光輝やく淨火天、の三つの層をボナヴェントゥラは考えている。

産み出すもの (単純物体) と産み出されるもの (混合ないし複合物体) の両者を支配し統率するもの (*regentia, gubernantia*) に関する記述は、ネオ・プラトニズムの宇宙観、とりわけ『原因論』 (中世ではアリストテレスの作と考えられていたが、しかし、実際にはプロクロスの流れを汲むものである) のそれに依拠していると思われる。因みに『原因論』第8命題には、次のような言葉がある。「知性者は、自己の下にある全ての事物を、自己のうちに存する神からの力によって統率するものであり、その神的な力によって事物を保持している。なぜなら、その力によって事物の原因だからである。そして知性者は、自己の下にある全ての事物を保持し、それらを包含している。こうしたことの理由は次の如くである。すなわち、諸事物に対して第一であり、またそれらにとって原因であるところのものは全て、それらの事物を保持するものであり、またそれらを統率するものであって、その高き力の故に、それら諸事物のうちの何ものも、その保持統率するものから逃れ去ることはない。それゆえ、知性者は、知性者の下にある諸事物の統領であり、それら諸事物を保持し統率するものである。それはちょうど自然が自然の下にある諸事物を知性者からの力によって統率するのと同じである。そして、同じように知性者も神からの力によって自然を支配するのである。*intelligentia est regens omnes res quae sunt sub ea per virtutem divinam quae est in ea et per eam retinet res, quoniam per eam est causa rerum ; et ipsa retinet omnes res quae sunt sub ea et comprehendit eas. Quod est quoniam omne quod est primum rebus et causa eis, est retinens illas res et regens eas et non evadit ab eo ex ipsis aliquid propter virtutem suam altam. Ergo intelligentia est princeps rerum quae sunt sub ea et retinens eas et regens eas, sicut natura regit res quae*

sunt sub ea per virtutem intelligentiae. Et similiter intelligentia regit naturam per virtutem divinam.

ボナヴェントゥラの宇宙観、光の作用、天使の働きに関しては、*Breviloq.* p.II, c. 3 [V 220 b–221 a], *II Sent.* d. 2, p. 2, a. 1, qq. 1 et 2 [II 70–75], d.10–11 [II 259–290], d.14, p.1, a.14, q.1 [335–350] 参照。尚、光の作用に関しては Gilson, *La philosophie de saint Bonaventure*, p.219 以下参照。

- (5) 『ヘブライ書』1章14節。
- (6) 天体を指す。第5元素のアイテールから成ると考えられていた。註4及び *II Sent.* d.14, p.1, a.1, q.2 [II 338–341] 参照。
- (7) 中間的感覚 (sensus intermedios) と中間的なもの (intermedia) に関して、F₁ は、視覚と触覚がそれぞれ固有の対象の形象を、無媒介的に直接得るのに対して、聴覚と味覚と嗅覚は媒介によって (mediate) 固有の対象の形象を捉えたと説明している [F₁ p.47, n.2]。E₂ は別の解釈をし、D₁ は (多くの場合にそうであるように) 補足・訂正を加えつつ E₂ の解釈に従っている。すなわち、E₂、D₁ によれば人間の身体における感覚器官の位置からして「中間的」という言葉が用いられており、また小宇宙と大宇宙の間には対応が見られるゆえ、感覚器官の対象となる可感的なるものも、大宇宙における位置からして「中間的」という語が述語づけられている、というのである。つまり、小宇宙なる人間の視覚は五つの感覚器官のうちで最も高い位置にあり、触覚(手)は最も低い位置にある。そして視覚の対象である第5元素のアイテールから成る天体(註6)は大宇宙の中でもっとも高い位置にあり、触覚の対象である土は最も低い位置にある。そして、聴覚・味覚・嗅覚は中間的な位置にあり、その対象である空気・水・火は、アイテールと土の中間の位置を占めている。(註4参照) こうした考えは中世には一般的だったという。Honorius Augustodunensis, *Elucidarium*, I, 11 (PL 172, 1116) 参照。
- (8) 四つの第一諸性質 (quatuor primariae qualitates) とは、熱・冷・乾・湿を指す。*Breviloq. ibid.* n. 3。
- (9) 光・音・香・味そして四つの第一諸性質がそれぞれ個別的に視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の対象であるのに対して、数・形・静と動は、五つの感覚に共通する対象である。Aristoteles, *De anima* II, c. 6, 418 a 18 参照。
- (10) Aristoteles, *Physica* VII, c. 1. ; VIII, c. 4.
- (11) 霊的動者 (motores spirituales) というのは、動物や人間の身体を動かす魂 (anima) と天体を動かす天使を指しているのであろう。2節参照。
- (12) D₁ が指摘しているように、ここで運動について述べるボナヴェントゥラの意図は明らかでなく考察を必要とする。ボナヴェントゥラは、可感的世界の動を通して天使の認識に導かれると言うことによって、更に不動の第一動者である神の存在が推し量られると考えているのだろうか。

- (13) 例えば、視覚の対象や聴覚の対象の場合、媒体は空気である。
- (14) ここで述べられている知覚の成立の構造は、おおむね当時アヴィケンナやアヴェロエスの著作を通して知られてきたアリストテレスに準拠するものであろう。ここで外部器官〔眼・耳・舌・鼻・皮膚〔手〕〕に対して内部器官が具体的に何を指しているか明らかでない。ボナヴェントゥラはアヴィケンナの『靈魂論』第4部第1章によって四つの内部感覚 (*sensus interiores*) を指定している。すなわち、共通感覚 (*sensus communis*)・表象力 (*phantasia* あるいは *imaginatio*)・評定力 (*vis aestimativa*)・記憶力 (*vis memorativa*) である。しかしながら、一処において、これら四つを列挙してはいない。内部感覚という言葉は、この書においては第1章10節及び第2章6節に用いられているが、外部感覚(五感)が各々固有の器官を必要としているのと同様に、内部感覚もまた各々固有の器官を必要としているとボナヴェントゥラは他処で述べているのみである (“*Sensus sive interior sive exterior est potentia egens organo determinato.*” *IV Sent. d. 50, p. 2, a. 1, q. 1, f. 2* [IV, 1045])。内部感覚に関しては Thomas, S.T. I^a q.78, a.4 参照。
- (15) *appropriate loquendo* というのは、ある属性がある事物に独自のものではないが、しかし、他の事物よりも、その事物により一層関係づけられるという意味である。三位一体の三つのペルソナについて、特に *appropriatio* (帰属) ということが言われる。
- (16) Augustinus, *De musica* VI, c.13, n°38 ; *De civ. Dei* XXII, c.19, n° 3.
- (17) Aristoteles, *De anima* II, c.12 ; III, c.2 (426a28-b8) et c.4 (429 b 1-3) 参照。
- (18) 不変 (*incommutabilis*) は運動の、無辺 (*incircumscribibilis*) は場所の、無限 (*indeterminabilis*) は時間の否定であり、霊的である (*spiritualis*) ことは物体性の否定である。Augustinus *De vera religione* c.30, n.56 sq. 参照。
- (19) 拙稿「魂の歷程—Bonaventura, *Itinerarium mentis in Deum* 第1章註解」(『南山神学』第7号1984,p.121) 註8参照。
- (20) 『コロサイ書』1章15節及び『ヘブライ書』1章3節。
- (21) ここでは、知覚における形象のあり方・役割が三位一体における第二のペルソナのあり方・役割のアナロギアとなっている。つまり、形象は知覚の対象から発する対象の類似であり、この形象を知覚する者は、それによって形象の源に導かれる(すなわち対象を認識する)が、これは、御子が御父から生まれる御父の類似であり、御父と全く等しいものであることをアナロギア的に示している。そして、対象の類似である形象が、対象より発すると同時に、感覚器官に刻印されるに先立って媒体全体に産み出されるように、御子も御父より誕生すると同時に宇宙万物に遍在する。続いて、形象が肉体的器官に刻印され結合し、それによって知覚が成立し、次いで対象の認識が行われる(形象の始源である対象に導かれる)ように、一個の人間と結合し受肉した御言なる御子は、始源である御父へ人間を導いていく。それゆえ、この可感的世界は、御子の御父よりの永遠の誕生を物語っている。宇宙を神のアナロギア的表現とみる見

方は、ボナヴェントゥラの世界観の特徴となっている。かゝる世界観は、例えば Gerard Monley Hopkins のようなキリスト教神秘主義の詩人たちに影響を与えている。Leonard Bowman, “Bonaventure and the Poetry of Gerard Manley Hopkins”, *Bonaventura 1274~1974*, Grottaferrata (Roma), 1974, p.553-570.

- (22) ここで第一の象 (prima species) という言葉が第二のベルソナに対して用いられているのは、形象 (species) と美 (speciositas) との関わりからである。意味としては、前節末の像 (imago) と同じである。因みに諸訳を挙げれば、Image (F₁), Image du Père (F₂), image (F₃), Urspezies (D₁), Bild (D₂), Species (E₁, E₂, E₃, E₄), especie (S)。
- (23) E₂ の註 9 によれば、この定義は Avicenna, *Metaphysica* tr.8, c.7 “Quoniam delectatio non est nisi apprehensio convenientis, secundum quod est conveniens” に則するものであるという。
- (24) 第二のベルソナである御子を意味する。
- (25) この節は、Augustinus, *De vera religione*, c.18, n°35 sq. ; c. 43.n°81 sq. に拠っていると思われる。
- (26) 理性も理拠もテキストでは同じく ratio である。諸翻訳を挙げれば以下の如くである。un rapport – un rapport (F₁), une loi – une loi (F₂), x – la conception (F₃), die Vernunft – ein Grund (D₁), ein Begriff – ein Begriff (D₂), the reason – the... reason (E₁), reason – a reason (E₂), something that is... – something that is... (E₃), x – something... (E₄), razones – razones (S)。 (×は訳のないことを示す。)
- (27) Augustinus, *De vera religione* c.31, n°58 ; *De libero arbitrio* II, c. 14, n°38.
- (28) 御言なる御子のこと。ars の意味については、拙稿「魂の歷程……第 1 章註解」註 57 参照。
- (29) 原文は per illam non tantum fuit forma cuncta producens, verum etiam cuncta conservans et distinguens……となっているが、筆者の見限り、fuit を現在の意味で訳しているものが殆どである (例外 D₂, E₁, F₂)。ボナヴェントゥラは、創造の時を過去と考えて過去形を用いたと考えることができよう。
- (30) この節は、ボナヴェントゥラのアイデア論の要となっている。この点については、彼のアイデア論に関する論文において論じる予定である。尚、*Quaestiones disputatae de scientia Christi* q.4 [V 17-27] 参照。
- (31) c.40, n.74 – c.44, n.82 参照。
- (32) numerus を数とここでは一応訳したが、アウグスティヌスが numerus の語にこめる意味は多様である。F. - J. THONNARD は、それを以下のように四つに区分し段階づけている。即ち、(1)一般に用いられている数学の意味で、*De libero arbitrio* II, c. VIII, nn°20-23。(2)音楽や詩におけるリズムの意味で、*De musica* I - V。(3)この世界における諸々の運動において諸部分の間の調和、また人間の様々な行為 (感覚的・

知的・倫理的)における調和の意味で、*De musica* VI。(4)神における一性の充満——この一性は数学的諸法則、リズムの美しさ、世界と人間の凡ゆる調和の源となっている——の意味で。*Oeuvres de Saint Augustin* 7 p.513-515 参照。

なお、ここで続いて7つの *numerus* の種類が挙げられているが、意味からすれば *numerus* の訳はリズムないし調和であろう。7つの数のそれぞれのラテン語に適当な訳をつけるのは困難で、訳をつけずにラテン語をそのままに残しているものもある(例えば D_1)。ここでは意識せずに、ラテン語の字義通りに訳してみた。

- (33) *numerosae* の訳としては、数の、数々の、種々の、韻律的な、旋律的な、など可能であるが、ここでは「調和のとれた」と訳した。因みに諸訳を挙げれば、*grosse de nombres* (F_1)、*le nombre se trouve dans toutes choses* (F_2)、*muß allem die Zahl zugrunde liegen*(D_1)、*zahlenrhythmisch*(D_2)、*rhythmical*(E_1)、*subject to number* (E_2)、*related to number* (E_3)、*in numerical harmony* (E_4)、*numerosas* (S)。
- (34) Boethius, *De arithmetica* I, 1 sq. 参照。
- (35) ここで知恵は *Sapientia* と大文字で書かれており、第二のベルソナである御子を意味している。
- (36) 拙稿「魂の歷程……第1章註解」註41 参照。
- (37) これ (*quod*) というのは、痕跡を指すと考えることもできるが、数を指すとする方が適当であろう。いずれにせよ、数は痕跡であるとポナヴェントゥラは言っている。諸訳を挙げれば、*Ce vestige* (F_1)、*Ce vestige (le nombre)* (F_2)、*sie* (D_1 , D_2)、*this* (E_1 , E_3 , E_4)、*number* (E_2)、*vestigio* (S)。
- (38) 拙稿「魂の歷程……序文註解」註16 参照。
- (39) 原文は *ad contuendum Deum* である。*contueor* という言葉は、*Itinerarium* では6章2節及び7章1節で、また *contuitus* (*contueor* の行為・働き)は4章2節で、*contuitio*(*contueor* の結果)は6章1節で用いられている。*contueor* は認める、知る、と做す、の意味であり (A. Blaise, *Dictionnaire latin-français des auteurs chrétiens*)、ここでは神を被造物を通してまた被造物において知る、認めるという神の非直接的理解を指す。
- (40) *institutio* が秘跡を意味していることは、以下の文脈から明らかである。
- (41) 『創世記』18章参照。
- (42) 『ロマ書』1章20節。
- (43) 同上。
- (44) 『ペトロ前書』2章9節。
- (45) 『コリント前書』15章57節。
- (46) 『ペトロ前書』同上。

The Soul's Journey to God (3)

A translation with notes and commentary of St. Bonaventure's
Itinerarium mentis in Deum, Chapter 2

Hisako NAGAKURA

Following the scheme proposed in the Prologus to the *Itinerarium mentis in Deum*, St. Bonaventure treated in the first chapter of this work the first step in the soul's ascension to God and showed how the sensible realities manifest the intelligible divine realities, that is, the power, the wisdom and the goodness of God (my translation with notes and commentary of the Prologus is found in No. 5 of *Nanzan Shingaku*, and that of the first chapter in No.7).

In the second chapter the Seraphic Doctor deals with the second step of the soul's journey to God. He invites his reader to contemplate the divine mysteries in the fact that the whole world, the macrocosmos, enters the human soul, the microcosmos, through the five senses. He describes the structure of the created universe and the way by which the universe enters and affects the soul. The apprehension of sensible objects by the soul manifests analogically the eternal birth of the Son from the Father; the delight which sensible objects bring to the soul leads it to the Son, Source of all delights; and the judgment which gives an account why these objects delight the soul postulates the eternal, unchangeable divine reasons (*rationes*).

The description by Bonaventure of the structure of the universe and that of psychology are based in general on Aristotle. Aristotle, in turn, was transmitted through a Neoplatonic interpretation. The Doctor astutely puts this Aristotelian cosmology and psychology in the service of an Augustinian vision of the World. Relying on the sixth Book of the *De Musica* of Augustine, Bonaventure further develops the numerical vision of the world and provides an ascent from the numbers found in the material world to God, Source and Exemplar of numbers. For him, as for Augustine, who contemplated the divine mysteries in the light of Neoplatonic ontology, the created universe is

the shadow, the echo, the picture, the vestige, and the sign of the Creator who is the Exemplar of the universe. The whole of the creation reveals the divine mysteries. God, in surplus, gave to humanity special signs in the history of salvation. So man has no excuse for denying the existence of God. Quoting the letters of St. Paul and St. Peter (Rom. 1, 20 ; I Cor. 15, 57 ; I Pet. 2, 9), Bonaventure concludes this chapter, and invites his reader now prepared by these two chapters to enter his mind which is in fact the shining mirror of divine realities.